

拡張型のトゥールミンモデル

——ライティングへの橋渡しの提案——

青木 滋之

0. はじめに

大学初年次教育の眼目の1つとされているのが、「これまで文章を書く訓練を行ってこなかった高校生を、大学で要求されるレポートや卒論を書けるようにすること」、「比較的長い文章を、パラグラフライティングの技法を用いてレポート作成ができるようにすること」等の、<書くこと>についての学生の能力をいかにして伸ばすか、であるように思える(注1)。そして、大学でのライティングでは、パラグラフライティングの技法が強調されることが多い。「文頭にはトピックセンテンスを置きなさい」、「トピックセンテンスに続くのがサポーティングセンテンスである」、「トピックセンテンスをつないで読むだけで全体の流れが分かるようにしなさい」・・・といった内容が、それである。

しかし、実際に文章表現の授業を担当したり、学生にレポートを書かせて気付くのは、形式的にはパラグラフライティングに従ってはいるものの、中身の薄い(あるいはスカスカ)の文章を書く学生が往々にしているということである。書く内容やテーマについての考えを深く掘り下げることなく、殊更パラグラフライティングの技法を一辺倒に教えるだけの授業では、そうした形式主義に陥ってしまう危険性が常にある。本稿では、学生が優れた内容のレポートや小論文を書く上でのロジックを鍛えていく上で役立つと思われる、トゥールミンの議論モデル(Toulmin's Model of Argument: TMA)という思考ツールを紹介し、これがどのようにライティングの授業に役立つのかを、授業実践を交えて考察しようと思う。

本稿の流れは、以下の通りである。まず一節で、パラグラフライティングという形式を満たしていても、優れているとは言えないレポート例を挙げて、そうしたレポートに何が足りないのかを考察する。次いで二節では、あるテーマや論題について掘り下げ深く考えていく上で役立つ、トゥールミンモデルを紹介し、現在の研究動向についても少しばかり説明を加えようと思う。最後の三節では、トゥールミンモデルを手直ししながら使うことで、どのように論証的な文章を書いていくことが可能であるのか、一節でのレポート例の改善という形で、規範的な視点から考察を行いたい。先に断っておきたいが、以上のアウトラインから窺い知れるように、私はパラグラフライティングの技法そのものに異議を唱えているわけではない。優れたレポートや小論文が持つ両車輪の片輪(形式性)を補完する、もう一つの片輪(論証性)が必要である、と言いたいわけである。

1. パラグラフライティングだけで十分か

本節では、パラグラフライティングという形式は満たしているものの、レポートや小論文として満足いく評価が得られなさそうなレポート例を取り上げて考察する。パラグラフライティングは、言うまでもなく文章を書く構成方法の1つである。文章の構成として、他にも起承転結だとか、導入-本体-結論の三部構成だとか、直列型や並列型といった色んな型が知られている。パラグラフライティングは、こうした雛形と両立するものであり、汎用的なテンプレートと言ってよいと思うが、以下の3点を核としているよう

に思える(注 2)。

- ・パラグラフの始めにトピックセンテンスを置く。
- ・後続のサポーターセンテンスはトピックセンテンスを敷衍する。
- ・トピックセンテンスをつなげて読むだけで、全体の論旨が分かる。

例えば、以下のような文章は、パラグラフライティングが守られている例だ(注 3)。

例) ディベートは議論教育に有用である

ディベートは、議論をするにあたって必要となる 3 つの力を伸ばすので有用である。すなわち、議論を聞き取る力 (インプット)、議論を分析する力 (処理)、議論を伝える力 (アウトプット) を、ディベートは効率よく伸ばすことが期待される。それぞれについて、以下に述べていこう。

第一に、ディベートは議論を聞き取る力を伸ばす。ディベートの試合では、相手の議論をしっかりと聞き取らないと公平な第三者を説得することができなくなる。ゆえに、試合を有利に運んでいくために、相手の議論をしっかりと聞き取りメモする動機付けが与えられ、実際に、試合の勝敗を通じて聞き取る力が伸びていくことが確認される。

第二に、ディベートは議論を分析する力を伸ばす。ディベートの試合で勝つためには、限られた時間の中で効率よく相手の議論を潰し、自分たちの議論を擁護していく必要がある。そのため、相手や自分たちの議論の急所を見抜き、適切な反論を行うといった分析能力が伸びていくわけである。

第三に、ディベートは議論を伝える力を伸ばす。ディベートでは、公平な第三者を説得することで勝敗が決まるが、その際に自分たちの考えが聞き手にしっかりと伝わるかどうか、勝敗を分けるポイントとなる。それゆえ、ディベートを通じて第三者に議論を分かりやすく伝える能力が向上する。

以上のように、ディベートは、大学や企業において必要となる、議論の聞き取り能力、分析力、伝達力を効率よく身につける良いトレーニングとなる。あなたの大学や会社でも、是非導入されてはどうかだろうか。

これは、いくつかの根拠を並列して挙げる、並列型と呼ばれる型である。導入部で主張が述べられており、以下、3 つの根拠が挙げられ、最終部で再び主張がくり返される。パラグラフの先頭文がトピックセンテンスとなっており、後続のサポーターセンテンスがトピックセンテンスを敷衍し、トピックセンテンスをつなげて読んでだけで全体の論旨が掴める。パラグラフライティングとしては、模範的な例と言ってよいだろう。

しかし、パラグラフライティングはあくまでも汎用的な情伝伝達「形式」であって、その中身の良さを保証はしない。上のディベートの場合だと、フラットな並列型で済んだが、次のようなケースはどうだろうか。これは、実際に筆者が学生にレポートを課したとき、似たようなレポートを学生が書いた例である。

私は、人生は有意味だと思います。3 つの理由を挙げます。

第一に、私には毎日会う友人が大学にいます。友人がいるということは、人とのつながりを持つということであり、それが人生に意味を与えていると考えられます。

第二に、私には大学卒業後の展望があります。会津大学はコンピュータの専門家を育てる大学であり、卒業後には SE として働くというビジョンを私も持っています。こうしたビジョンを持つことで、人生

に意味が生じてきます。

第三に、好きな趣味があるからです。大学ではカードゲーム同好会に所属しており、週2回の活動で、仲間とカードゲームをします。授業の合間にも、食堂で仲間とカードゲームをして、楽しいことも多いです。なので、人生が有意味だと感じています。

以上の3つの理由から、私は人生が有意味だと判断します。

この文章は、確かにパラグラフライティングの規則（パラグラフ始めにトピックセンテンスを置く、サポーターセンテンスが敷衍する、トピックセンテンスをつなげて全体の論旨をつくる）に従ったもので、総論-展開-結論という3部構成にも従ったものである。ゆえに、形式的には満足のいくものに仕上がっている。だが、はたして優れたレポートかと問われれば、疑問を感じざるを得ないだろう。優等生的ではあるが、中身がスカスカのように映るからである。つまり、単なる「型」を守っただけでは、十分に説得力のある、納得のいくレポートには必ずしもならない、ということである。これは、どうした事情なのであろう。

おそらく不十分であることの原因は、(広い意味での) 論証性が上の文章には欠けている、という事態であろう。「人生は有意味であるか」という問いに対して、上の文章では3つの独立した根拠が並列的に挙げられているのが分かる。では、これらの3つの根拠を並列するだけで、問いに十分答えたものになっているのだろうか。つまり、

- ・毎日会う友人が大学にいること
- ・大学卒業後の展望があること
- ・好きな趣味があること

というそれぞれの根拠が、「人生は有意味である」という主張を本当に支えるものであるのか、というのがここでの疑問である。以下のような一連の問いが、浮かんでくる。

(1) まず始めに、「人生が有意味である」ことが一体いかなる事態であるのか、何ら説明なり定義が与えられていないのが問題である。大学でレポートが課される場合は、「人生の意味」「現代人の心理」「社会における規範」のような漠然としたテーマについて尋ねられることが頻繁にあり、そうした場合には、自分なりに言葉の定義や議論の絞り込みを行うことも求められる。上のレポートは、そうした大事な問題を括弧でくくってしまい、自明なものとして扱ってしまっている点に問題がある。

(2) 次に、3つの根拠と主張(人生の有意味さ)とのつながりが不明確である点も挙げられる。上のレポート例では、何が人生の「有意味さ」に該当するのか述べられていないが、ここで仮に、「幸せな生活を送ること」といった緩い定義(注4)を採用したとしよう。それでも、なぜ友人がいることや卒業後の展望があることが幸せな生活につながるのか、必ずしも明確ではない。この点について、未だ言葉足らずである。本論で後に見ることになる、ワラントが欠けているわけである。

(3) 最後に、3つの根拠がバラバラであり、有機的なつながりを成していない。ただ、思いついた事を適当に並べているだけのように映り、何をもちこの3つの根拠を出してきたのか、なぜこの順番で並べたのか、よく分からないままである。この点で、前出のディベートの文章例のように、インプット→処理→アウトプットのような有機的なつながりを持っているケースとは対照的である(注5)。

以上の問題点は、(1) 言葉の説明・定義、(2) 主張—根拠のつながり、(3) 論証の全体構造、というフレーズで纏めることができるだろう。本稿では、これらを含めて(広い意味での) 論証と呼ぶことにする。

そして私が見る限り、学部生が書く不満足なレポートに典型的に見られるのは、これら3つの問題点である(注6)。言葉について考えもなしに書き出す、根拠がなぜ主張につながるのか舌足らずである、全体についての見通しが悪い・・・これらは、評価の低いレポートや小論文によく見られる特徴である。ここで特筆すべきは、パラグラフライティングを守るように文章指導を行った上でも、こうした上のようなレポートを書く学生が後を絶たない、ということである。パラグラフライティングといった型を一生懸命教えても、上のようなレポートを書く学生を助長してしまう危険性が、常にあるのである。そこで我々は、学生にレポート作成法を教えるにあたって、形式的な指導のみならず、内容的な充実を図る上で、(広い意味での)論証についての考え方や、トレーニング方法についても同時に考えないといけない。形式性と論証性、双方の車輪を備えた文章を、学生に書いてもらいたいわけである。

2. ツールミンモデルとは何か

本節では、論文の論証性を考える上で役立つ思考ツールと思われる、ツールミンの議論モデル(Toulmin's Model of Argument)を紹介する。ツールミンモデルは、知っているだけではレポートや論文作成の指導には不十分で、活用法や指導法についてもノウハウや経験値を高めていく必要があるだろうが、まずはモデルについて十分な理解が必要である。そこで、本節では、文章作成指導に役立つ範囲で、その大事な点を説明していきたい。先に要点をかいつまんで説明すると、以下の通りである。

- ・モデルは「試論」として登場したわけで、ユーザーが発展させていった方がよい。(2-1)
- ・フルモデルは法学を念頭に作られた。そのままの形で他分野には当てはめづらい。(2-2)
- ・フルモデルには他にも、様々な難点が指摘されている。使う者が分野や用途に合わせて、手直していくことが望ましい。(2-3)

2-1. ツールミンモデルが登場した経緯と、その試論的な性格

ツールミンモデルの初出は、1958年に出版された *The Uses of Argument* という非形式論理の哲学書である。『議論の技法』というタイトルで翻訳されているが、分かりやすく言えば、「実際の議論はどう使われているか」ぐらいの意味合いである。実際の議論、とわざわざ書いたのは、ツールミンはこの書物で、従来の形式論理に不満を持ち、実際に行われている議論を理解するためのツール(議論の一般的レイアウト)を素描しているからである。例えば、次のツールミンの言葉が象徴的である。

以下に続くものは、私がすでに述べたように、単なる試論(essays)にすぎない。もし、我々による議論の分析が、本当に効果的で、生活に沿ったものであるようにしたいのであれば、本書で示唆さえされていないような概念や区分を利用することが必要になってくるのが、大変あり得ることであろう。しかし、私は次のことには確信している。つまり、論理を一般化された法学(jurisprudence)として扱い、我々のアイデアを、哲学者の理想[アリストテレス以来の形式論理学]ではなく、実際の議論評価の行い方(practice)に照らしてテストしていくことで、我々はつまるところ、伝統的な構図とは大変異なる構図を構築していくことになるであろう。

Toulmin(1958/2003), pp. 10/9-10.

このパッセージは、同書の序論の終わりのところに現れるものであるが、ツールミンモデルの持つ重要な2つの側面を表しているように思える。1つは、理想的な形式論理学ではなく(注7)、実際の議論の行い

方(practice)に注意を向けつつ、試論を試みているという点。もう 1 つは、実際の議論の範を法学(jurisprudence)に求め、そこからのアナロジーによって議論の構図を構築していこうとする点である。これら 2 点は、トゥールミンモデルの解説書では全くと言ってよいほど触れられていないが、とても重要な点である(注 8)。特に、後者の「法学を議論の範とする」という言は見落とされがちで、後述するようなトゥールミンモデルの適用上での問題点を発生させる直接的な原因となるものであるが、ここではとりあえず、「トゥールミンは、実際の議論の行い方に合わせて、主に法学での議論を範として、議論というものを理解しようとしていたのだな」という点を確認しておくことにしよう。

トゥールミンモデルが登場する *The Uses of Argument* は、もともと一般(大学)教育向けに書かれたものではなく、伝統的な形式論理への代替的論理を素描するために書かれたものである。そして、トゥールミン自身の 2005 年での回顧的な講演によれば、プロの哲学者や論理学者によって、当初は冷笑的に扱われたという。だが、哲学の分野外での、コミュニケーション学の人たちによって取り上げられ、その後色んな分野へと波及しつつ現在へと至っている。トゥールミンは次のように言っている。

だから私は、同書が売れ続けていたことに驚いていたのだが、そのいくつかの[売れ続けていたこと]の理由は、私が初めてアメリカを訪れたときにやっと分かったのである。また私は、ミシシッピ川地域のあちこちで、同書がコミュニケーションの理論として使われていることを見出した。私は当初、このことに驚いたのであるが、今では大変有難いことだと感じている。私の数ある著作のうちで、唯一絶版になっていないのは本書だけである。

Toulmin(2006), p. 26.

こうしてトゥールミンモデルのネタ本は、哲学の同業者ではなく、レトリックやコミュニケーションを学ぶ他分野の人たちに取り上げられ、とりわけ議論やディベートの教科書などで頻繁に取り上げられるようになって、現在へと至っている(注 9)。そうした意味で、同じく科学哲学者である T.クーンの「パラダイム」という言葉が、本人が訂正・撤回したにもかかわらず、他分野の者たちに広く使われて人口に膾炙されていったのとよく似ている。ちなみに、トゥールミンの妻がシカゴの大学で法律学を学んでいたとき、隣りに座っている男性に「私が彼の妻です」と言ったところ、その男性から「トゥールミンは、アリストテレスのすぐ後の時代に生きていた人物なのだから、そんなことは有り得えない」と言われたそうである(注 10)。トゥールミンモデルを使っている人たちの意識や理解といったものは、その程度のものなのであるが、象徴的なエピソードであると思ったのでここで触れておく。

さて、ここでポイントとなるのは、トゥールミン本人の大きな試論的プロジェクトという意図とは離れて、トゥールミンモデルが「著名な哲学者の提唱した議論モデル」として固定化されて、一般に伝播・流布されていった点だと私は考える。ここには、2 つの不幸な歴史的経緯があるように思える。一方で、トゥールミンモデルを教え使う人たちは、コミュニケーション学や、現在では一般教育に携わる人たちであり、トゥールミンモデルそのものを天下一の紹介すること以上のことをしてこなかった。だから、たとえモデルに当てはまらない現実の議論に多く出くわしたり、モデルが使い勝手が悪いと感じたとしても、モデルそのものを改善・改定しようという機運が生じてこなかったように思われる。他方で、トゥールミンと同じ哲学畑や論理学畑の人間が、トゥールミンモデルというプロジェクト(試論)を継承し検証してきたのかと言えば、いくつかの優れた例を除いては、ほとんど行われてこなかったように思える(注 11)。現在でも、“プロ”の論理学者に関心があるのは、未だに(非古典的論理を主流とした)形式論理であり、トゥールミンモデルのような、日常的論理の定式化といった作業は等閑視されてきている。つまり、「トゥ

ールミンモデルを使う人は、モデルに口を出さない。論理のプロはトゥールミンモデルに関心がない」という状況が、*The Uses of Argument* が出版されてから 60 年ほど続いてきている、というのが実情なのではないだろうか。

しかし、ここ 20 年ほど、非形式論理への関心や、一般教育におけるクリティカルシンキングの需要が高まってきたことにより、トゥールミンモデルに言及する哲学・論理学の業界人も増えてきている。例えば私は、もともと、学部生時代に ESS という英語サークルでディベート活動に没頭していた頃にトゥールミンモデルを知ったが、大学では教養教育として文章表現（ライティングの授業）を担当することになり、トゥールミンモデルを活用できないものかと考えてきた(注 12)。アカデミックスキルに関連する書籍や、初年次教育といった文脈でも、「トゥールミンモデル」という名前を聞くことは、珍しくなくなってきている。日本でトゥールミンモデルに言及する／を研究する哲学畑の人間はまだ少ないようだが、その潜在的な有用性や汎用性、大学教育での需要・重要性を鑑みて、もっと多くの研究がなされるべきだと思う。また、哲学・論理学畑ではないが、トゥールミンモデルを教えたり使ったりしているコミュニケーション学、議論学、大学での一般教育に携わる研究者は、もっと“外野から”野次を飛ばしてもいいのではないだろうか。つまり、トゥールミンモデルを天下一の使った授業例の紹介等に留まるだけでなく、トゥールミンモデルそのものについて、あれこれ問題点を指摘したり、手を加えて改善していく、といった作業に手を出しても良いのではないかと思う。モデルを「試論」と称したトゥールミン自身、そうした発展を望んでいたはずである。

2-2. トゥールミンモデルは法学での議論を念頭に置いたモデルである

トゥールミンモデルについては、すでに優れた解説書があるので、モデルの詳細についてはそうした本に譲るとして(注 13)、ここではトゥールミンモデルに現れる C, W, D, B, R, Q という各項目が、そもそも何故登場したのか、という背景について考察していきたい。それが、トゥールミンモデルの本性を理解し、適用上の限界を査定する上で役立つと思われるからである。

まず始めに、トゥールミンが、彼の議論モデルを導入する直前に、次のように言っていることに注意すべきである。

我々の前には、一方では数学的モデル、他方では法学モデルという、ライバル関係にある 2 つのモデルがある。[...] いま問題となるのは、この標準的な形式[アリストテレスの三段論法]が十分に精巧で公平なものなのか、である。[...] 我々が行う議論のすべての要素を、「大前提」「小前提」「結論」という 3 つの見出しへと適切に区分することができるのか、また、これらのカテゴリは誤解を与えかねないほど数が少なすぎる、ということはないのだろうか？ そもそも、大前提と小前提の間には、「前提」という単一の名で括ってしまえるほどの十分な類似性があるのだろうか？

法学(jurisprudence)のアナロジーに訴えることで、こうした問いに光が照らされることになる。

Toulmin(1958/2003), pp. 95-96/88-89.

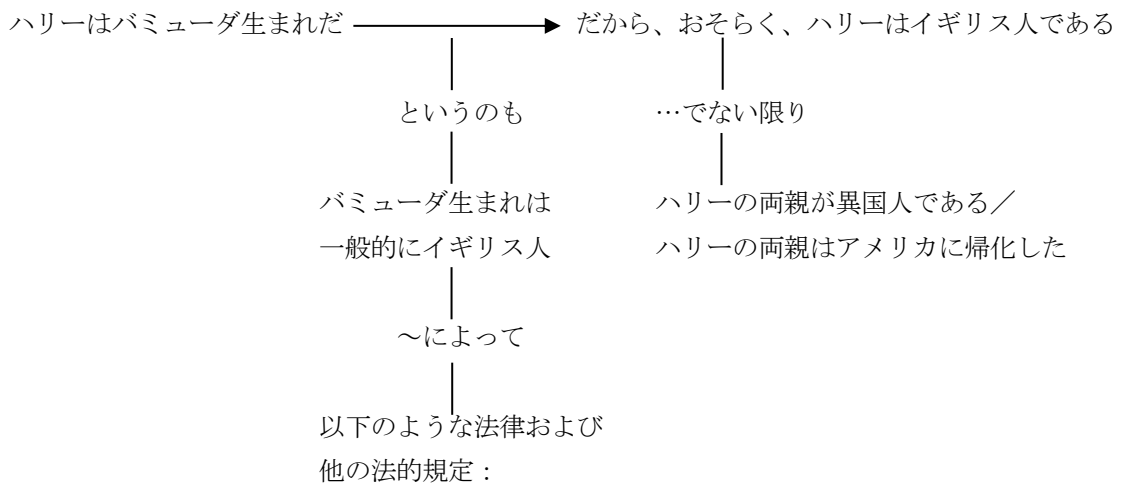
ここで、数学的モデルと法学モデルとが対比されているが、前者は形式論理を指し、後者はトゥールミンモデルのような非形式論理を指している。そして、トゥールミンは、伝統的な形式的三段論法によってではなく、法学からのアナロジーに訴えることによって、我々の日常的な議論が適切に理解されると考える。

法学からのアナロジーによって、何が新たに加わるのだろうか。トゥールミンが目にするのは、法廷で行われる、以下のような様々な機能を持った発話である。

- ・主張(claim)の陳述
- ・身元の証拠(evidence)
- ・争点となっている出来事についての証言(testimony)
- ・法律の解釈(interpretation)ならびにその効力(validity)についての議論
- ・法律の適用についての例外(exemption)申請
- ・情状酌量(extenuation)の嘆願
- ・評決(verdict)
- ・判決(sentence)

ここでは、三段論法に現れる大前提、小前提、結論という3つの項目には収まらない、多種多様な役割を持つ発話というものが読み取れる。そしてトゥールミンは、こうした法廷での発話を持つ役割をモデルに、議論というものを考えたわけである。

実際に、トゥールミンモデルが登場するときの議論の例を見てみることにしよう。そこに、法学からのアナロジーが端的に見て取れる。トゥールミンモデルとは、主張(C)、データ(D)、ワラント(W)、限定詞(Q)、反駁(R)、裏付け(B)という6つの要素を持つ役割から、議論の一般的構造というものを理解するモデルであるが、そこで現れる例は、以下のようになっている。



この例で、トゥールミンモデルを説明すると次の通りである。「ハリーはバミューダで生まれた(D)。だから、ハリーの両親が異国人であったり、ハリーの両親がアメリカに帰化した、といった事情がない限り(R)、おそらく(Q)、ハリーはイギリス人である(C)。というのも、バミューダ生まれは一般的にイギリス人であるからであり(W)、それは以下のような法律および他の法的規定によって定まっているから(B)である…。」

この例に典型的に見て取れるように、トゥールミンモデルというのは、データ(D)と法律・法則(W)の当てはめによって主張(C)を導く、という基本的形態をしているのが分かる。ここでの例が、国籍を話題にしていることに、そのことが顕著に見て取れるだろう。とりわけ、反駁(R)と裏付け(B)という、普段我々があまり馴染みのない要素が、最初からフルモデルに組み込まれているのは、トゥールミンモデルが法学的なアナロジーから創られたものということと深い関係がある。「一般的なルールとしては××だが、それには例外がある」、「一般的な慣習には、××という法的裏付けがある」ということを、この例における反

駁と裏付けは言っているからである。

以上のような、法学での議論を念頭に創られた議論モデルであるトゥールミンモデルは、果たして法学以外の領野でも有効なモデルなのであろうか。トゥールミン自身は、「異なる領野において我々が行う議論の形式(form)については、領野間で大きく変わる必要はない(注 14)」とカジュアルに述べているが、それは本当なのか。例えば、トゥールミンがこの言葉の直後で挙げている議論の例を見てみれば、彼が念頭に置いている議論のタイプが分かる。「クジラは哺乳類である」、「バミューダ生まれはイギリス人である」、「サウジアラビア生まれはイスラム教徒である」、等がそれである。クジラの例は分類に関する議論、バミューダ生まれの例は法律に関する議論であり、サウジアラビアの例は一般的法則(注 15)に関する議論だと理解できるだろう。いずれの場合でも、議論の出発点となるデータ(D)が確実であり、主張へと推論をつなげるワラント(W)が法則的だという点において共通している。つまり、データが不問の「所与」であること、データからの推論が「ルールの当てはめ」だという点において、Toulmin(1958)が挙げているケースというのは、本質的に法学的なアナロジーの枠内に留まるものなのである。では法学以外の、様々な領野の議論について、はたしてトゥールミンモデルは本当に上手く当てはまるものなのだろうか。

2-3. トゥールミンモデルの様々な難点

トゥールミンモデルについては、法学以外の領野での適用が上手くいくのかについて、あるいはトゥールミンモデルの図式そのものについて、これまで多くの疑問が呈されてきている。まず、トゥールミン自身が書いたものから回答が得られると思われる疑問点を紹介し、次いで、一般的に指摘されてきた数々の疑問点を列挙していくことにしたい。

(1) まず、あらゆる議論の出発点となるのが、はたしてデータ(D)と呼べるものであるのか、という疑問がある。「彼は正直だから、彼の言っていることは信じていい」、「誰もが幸福になりたいから、一生懸命生きている」といったような、我々が日々接しているような議論はどうだろう。こうしたよくあるような議論では、「データ」とは呼びづらいものが議論の出発点となっているものは多く見られる。つまり、「彼は正直である」、「誰もが幸福になりたい」は、はたしてデータ(D)と呼べるものなのか、という問題である。トゥールミンモデルがカバーできるのは、せいぜい、感覚的・数量的なデータか、事実と呼べるような、それ自体不問とされるような所与が与えられているケースに限られるのではないか、という目算が成り立ちそうである。

ここで注意すべきは、トゥールミンが「データ(D)」という道具立てを、後になって実質的に放棄している、という事実である。トゥールミンは、自らの議論モデルを素描した *The Uses of Argument* (1958) よりも 20 年ほど後に、*An Introduction to Logic* (1979) という非形式論理の教科書の共著者（その中の第一著者）となっているが、そこでは、「データ(D)」という用語は消えて、その代わりに「根拠(G)」という用語に置き換わっていることが認められる。この事実は、ほとんどのトゥールミンモデルの一般向け解説書では度外視されている（あるいは、トゥールミンの原著に当たることがない者には知られていない）が、重要な変更である。いわゆる「クレーム、データ、ワラント」という用語は、彼自身が放棄していたのである。なので、我々は、<データ>ではなく<根拠>という用語をトゥールミンモデルとして使っていくべきであろう。そして、「データ」という言葉の適用に違和感のあった上のような 2 つの例でも、「根拠」であれば別段問題ない。簡単に言うと、「根拠」は「データ」をも含んだ、包括的な用語であるので、汎用性が極めて高いと考えられる(注 16)。

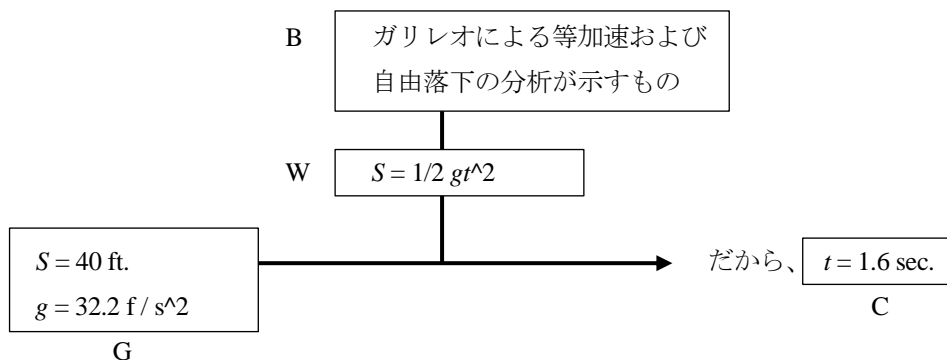
(2) トゥールミンモデルのような議論図式が、様々な領野での議論を表現するのに適しているのか、適用可能かという疑問である。トゥールミンは、1958 年の原著の中では、様々な領野への適用例というも

のをほとんど挙げていない。その後、前掲の *An Introduction to Logic* (1979) では、第 4 部を丸々割いて、「法学的な議論」「科学での議論」「芸術について論じる」「経営での議論」「倫理的な議論」の各章で、トゥールミンモデルを多様な領域での議論へと適用させていることが確認できる。この 1979 年初版の非形式論理の本は、1958 年の原著に比べて全く参照されることがないが、実は、トゥールミンモデルが本当に“使える”ものなのかを検討する上で、重要な情報源である。トゥールミンは共著者のうちの第一著者になっている事情から、彼が相当目を通したことは間違いない。

トゥールミンらによる、フルモデルの適用例がはたして上手くいっているのかどうか、筆者は科研費を取って研究者グループにより検討した機会があったが(注 17)、適用が半ば強引で、不自然な場合も少なからず見られた。いくつかのそうした例を紹介しよう。

まず、トゥールミンモデルがフルの形で使用されていることは全くと言ってよいほどなく、せいぜい使われているのは C,W,G 止まりである。場合によっては、C,G だけで済まされているケースさえある。こうしたことから、フルモデルに登場する、主張(C)、根拠(G)、ワラント(W)、限定詞(Q)、反駁(R)、裏付け(B)の 6 つの要素が、実際の議論を理解する上で本当に必要不可欠な要素であるのか、極めて怪しいと言えるだろう。なぜなら、トゥールミン自身、実際の議論を分析すると、6 つすべての要素が必要にならないことを認めていると見て取れるからである。

次に、仮に C,G を支える W,B が使われている場合であっても、それが非常にトリヴィアルに出てくるだけで、「なぜこれがワラント(W)なのか？」だとか、「これを裏付け(B)と呼べるのか？」と疑問に思えてしまうケースも結構ある。例えば、次の「科学での議論」からの例は、研究者グループの皆が、議論分析として上手くいっていないと考えた例である。



これは、落下距離と重力定数という根拠(G)から、時間という主張(C)を導き出す「議論」の例なのだが、そもそも、これは演繹的な「説明」の一種なのであって、「議論」(根拠から主張を導き出すこと)とは異なるのではないかと、という疑問がある。また、ここで B に入っているものがワラントの「裏付け」と呼べるものなのか、トゥールミンらが裏付けに与えた本来的な役割を考えると、首肯し難い。もともと、一般法則的なワラント(W)を支える事実となるものが、裏付け(B)であった。しかし、上の例だと、この裏付け自体が、ガリレオの主張となっていて、もう一度トゥールミンモデルを組む必要があるようなタイプの言明になっていることが分かる。このように、実際にトゥールミンモデルを当てはめようとすると、色々なところで無理が生じてくる。

こうした検討と並行して、筆者は、トゥールミンモデルがはたして実際の議論にどれだけ当てはまるものなのか、ディベートをテーマとしたライトノベルに現れる議論を題材として試行的に調べる研究を行ってみた。すると、*An Introduction to Logic* (1979)においてと同様に、C,W,G という最小単位でさえ満たされ

ない「議論」が、大多数を占めていることが分かった。Q,R,Bに至っては、全くといってよいほど使われないし、本質的な意味で必要とされているようにも見えない、ということも判明した。題材に現れた27のディベート場면을題材とした検討結果は、以下の通りである。特に興味深いと感じたのは、何らかの主張ないし議論が展開される場合であっても、何を正確に主張しているのかが明らかでないケースすらある、ということである。つまり、Cであっても解釈を要するようなケースがあるということが、実に意外なことであった（こうした泥臭いケースは、議論の教科書では始めから除外されているので、気付かれないものである。得てして、トゥールミンの出す例というのは、いずれも人工的である）。下の表では、例えば、根拠(G)に該当するものがハッキリ書かれている場合には「明示的に書かれている」、ハッキリは書かれてはいないが十分推測できる場合には「非明示的（と解釈できる）」、推測できるヒントさえ何も書かれていない場合には「そもそも書かれていない」と分類されている。

	明示的に書かれている	非明示的（と解釈できる）	そもそも書かれていない
Claim	17/27	10/27	0/27
Ground	11/27	14/27	2/27
Warrant	0/27	20/27	7/27
Backing	0/27	2/27	25/27
Rebuttal	0/27	4/27	23/27
Qualifier	0/27	1/27	26/27

(表1: ライトノベルのディベートを、トゥールミンモデルで分析した結果)

表から一目瞭然であるように、主張(C)と根拠(G)という主要素についてさえ、明示的に書かれていないケースが半分ほどある。ワラント(W)については、文章上に明示的に書かれていることはまずない。なので、読者が逐一補う必要が生じてくる。裏付け(B)、反駁(R)、限定詞(Q)については、さらに登場する機会が少なく、率直に言えば、なくても困ることはない。実際の議論を分析する上では、トゥールミンのフルモデルはほとんど無用の長物なのである。せいぜい、主張(C)と根拠(G)、ワラント(W)ぐらいで用は足りる。

以上、(1) (2) が、主だった難点であると私は考えているが、他にも多くの難点が、トゥールミンモデルに対して指摘されてきている。いくつか目立ったものを、列挙する(注18)。

- (3) トゥールミンモデルでは、反駁(R)は、根拠(G)→主張(C)の推論に対する例外規定として機能するものだが、ワラント(W)や裏付け(B)に対する例外規定を加えなくてよいのか？
- (4) 反駁(R)に、多くの役割を与えすぎなのではないか？
- (5) ワラント(W)に対する裏付け(B)だけでなく、根拠(G)や反駁(R)に対しても、裏付けが必要なのではないか？
- (6) 初学者が、根拠(G)とワラント(W)を混同してしまわないか？
- (7) 簡単なケースにしか、当てはまらないのではないか？

いずれも、フルモデルのトゥールミンモデルに対する原理的な難点を挙げているのが分かる。こうした難

点を踏まえて、トゥールミンモデルは拡張や手直しを加えて、いくつかの新しいモデルが提唱されている(注 19)。つまり、トゥールミンモデルというのは完全無欠でオールマイティーな議論図式などでは決してなく、議論の領野や論者の用途に応じて、手直ししていくことが必要なのである。本論では、トゥールミンモデルで最も基礎的となる主張(C)、根拠(G)、およびワラント(W)という 3 要素に注目しながら、議論というものを考えていくことにする。

3. トゥールミンモデルからライティングへ

2 節では、トゥールミンモデルが法学を置いたモデルであり、フルモデルを実際の議論に当てはめるのは難しいことを確認した。なので、6 項目よりも少ない道具立てで議論を考えていけばよい、というのが本節での基本的アイデアである。それでは、どのような道具立てが必要とされるのであろうか。表 1 を見ると分かるように(あるいは「議論」の構成要素を規範的に考えた場合)、主張(C)と根拠(G)は、議論が成り立つための必要最低限の要素であるが、それだけでは舌足らずな(ワラントが不明な)ケースもある。1 節で確認した、「人生の意味」についてのレポート例が、それである。ゆえに、主張(C)と根拠(G)にワラント(W)を加えた 3 要素—C-W-G のセットを 1 ユニットとして議論を考えればよいというのが、本節での提案である。それを踏まえた上で、もう一度、パラグラフライティングの形式性だけでは解決されない悪いレポートの特徴をおさらいしてみよう。

- ・問題となる言葉の定義(あるいは説明)が与えられていない
- ・根拠から主張へのつながりが不明確である
- ・論証の全体構造が有機的でなく、各論証がバラバラである

本節ではこれら 3 点をどう改善するかを考える。C-W-G というトゥールミンモデルを縦・横に拡張していくことで、しっかりと言葉を定義できるようになるのと同時に、ワラントを強化し、論証の全体構造を明確化していくことができる、というのが以下の趣旨である(注 20)。

ライティングで有用であるようなトゥールミンモデルの使用法というのは、<論証の拡張>を許すようなモデルであると思われる。ここでは、本論 1 節で取り上げた「人生の意味」についての悪いレポート例をどう改善していくか、という切り口から、トゥールミンモデルの手直しを考えていきたい。「人生には意味があるか」というレポート課題が出題されたと想定して、言葉の定義、根拠から主張への推論を保証するワラント、全体の論証構造、という学生が特に弱い 3 つの点について、トゥールミンモデルの使用法を考えていくことにする。

第一に、言葉の定義について。1 節での学生レポート例では、「人生の意味」という与えられたレポート問題を、何も定義することなしに論を進めていたのが問題だった。そこで、続く文章に現れる「友人がいること」、「SE として働くというビジョン」、「好きな趣味があること」という 3 つが、根拠として上手く働くような、ぴったりの定義を探してみる。そこで思いつくのが、人生に意味があるということ、「生活が充実していること」と言い換えてみることである。この言い換えが成り立てば、以下のような<縦>の論証の拡張ができそうだ、という見通しが立つ。

主張(C)：人生には意味がある

↑

根拠(G)：生活が充実している (から)

↑

根拠(G)：毎日会う友人が大学にいて、卒業後にはSEとして働くというビジョンを持っており、カードゲームという趣味で楽しんでいる（から）

ここに現れる2つの縦の矢印が成り立てば、元のレポートの題材を活かしながら、論理的に隙のない、満足のいくレポートに仕上がりそうである。では、縦の矢印を成功裏に確立させるには、どうしたらよいのだろうか。

ここでまず、言葉の定義について論証を固める必要がある。なぜなら、ここでの論証にはまだ隙があるからである。「生活が充実していることが、なぜ、人生には意味があることにつながるのか？」というワラントについての疑問が浮かんでくるだろうと思われる。

主張(C)：人生には意味がある

↑？

根拠(G)：生活が充実している（から）

ここでの？を埋めるために、ワラント(W)を入れて論証を補強することにする。ワラントとして、「人生に意味があることとは、生活が充実しているということである」という定義的な言明を入れれば、矢印が確固たるものになる。

主張(C)：人生には意味がある

↑

|——ワラント(W)：人生に意味があること＝生活が充実していること

|

根拠(G)：生活が充実している（から）

さらに、<横>への論証の拡張、つまり「なぜこの定義が受け入れられるべきなのか」という疑問に答える、さらなる根拠（ワラントを受け入れるための根拠）を考えてみよう。例えば、生活が充実していれば人生に意味があると言えるし、逆に、生活が充実していなければ人生は無意味なものとなるから、「人生に意味があること＝生活が充実していること」と言える、という論証を追加してみると、次のようになる。

主張(C)：人生には意味がある

↑

|—————ワラント(W)：人生に意味があること＝生活が充実していること

|

根拠(G)：生活が充実している（から）

↑

|——α

|

根拠(G)：生活が充実していれば人生に意味があると言えるし、
逆に生活が充実していなければ人生は無意味なものとなる（から）

ここで、さらに右側の縦の矢印（αの矢印）の移行に対する疑問に答えるために、さらに、ワラント(W)

を入れる必要があると指摘されるかもしれない。その疑問への答えとなるのは、実は、「主語と補語との間に必要十分条件が成り立つとき、それはよい定義である」といった類の言明なのだが、そこまで要求するのは行き過ぎであろう。どこまで厳密な論証を要求するかというのは、評価のレベル（学部生のレポートのレベルか、学会誌に掲載される論文のレベルか、等）や、扱われている対象（数学や情報科学であるか、人文学的な学問であるか、等）によって変化するので一概には決められない問題であるが、ここでは学部生のレポートレベルの話をしているので、これ以上は深く突っ込まないことにする。

以上、第一の言葉の定義という論点について限って見ただけでも、トゥールミンモデルが<縦>および<横>へと自然と拡張していくことが見て取れるであろう。

第二に、根拠とから主張へと橋渡しを行うワラントについて考えてみよう。学生レポート例で問題となっていたのは、「なぜ根拠から主張が出てくるのか？」という疑問に答えるためのワラントが貧弱なことであった。元レポートに戻って、論証を再現すると

主張(C)：人生には意味がある

↑

根拠(G)：毎日会う友人が大学にいて、卒業後にはSEとして働くというビジョンを持っており、カードゲームという趣味で楽しんでいる（から）

という論証構造になっていた。そこで我々は、ここでの主張(C)と根拠(G)とを結びつけるための言葉の言い換え（つまり定義）を入れた。それが、次のものである。

主張(C)：人生には意味がある

↑

|————— ワラント(W)：人生に意味があること＝生活が充実していること

|

根拠(G)：生活が充実している（から）

↑

|

↑

|

根拠(G)：生活が充実していれば人生に意味があると言えるし、
逆に生活が充実してなければ人生は無意味なものとなる（から）

|———？

|

根拠(G)：毎日会う友人が大学にいて、卒業後にはSEとして働くというビジョンを持っており、カードゲームという趣味で楽しんでいる（から）

ここで我々が行うべきことは、？にワラントを入れて、根拠(G)から主張(C)への推論を保証することである。幸い、我々はすでに、「人生の意味」という曖昧な言葉を「生活の充実」で言い換えているので、ここで我々が論証すべきステップは、「友人が大学にいて、卒業後のビジョンがあり、趣味で楽しんでいる」という根拠(G)から、「生活が充実している（＝人生には意味がある）」という根拠＝主張(G=C)が導き出す、というステップである。

では、ここでの複数の根拠(G)から、どうしたら主張(C)が導き出せるであろうか。このワラント(W)を探すことはそれ程難しいものではないが、疑問として出てくるものがあれば、それは「これら3つの状況か

ら、はたして生活が充実しているとまで言えるのか」であろう。そこで、一般的に「生活が充実している」とはどのような条件であるのかを、考えてみることにする。そして、こうした「生活が充実している」と言うための一般的な条件に合致していることから、これら3つの状況が根拠として機能する、という論証を行えばいいだろう。こうした論証を可能にするような「生活が充実している」ことの一般的条件はいろいろと挙げられるだろうが、例えば、「私生活および仕事において楽しめていること」を、「生活が充実している」ことの一般的条件としてみたらどうか。

主張(C)：人生には意味がある

↑

|————— ワラント(W)：人生に意味があること＝生活が充実していること

|

根拠(G)：生活が充実している (から)

↑

|

↑

根拠(G)：生活が充実していれば人生に意味があると言えるし、
逆に生活が充実してなければ人生は無意味なものとなる (から)

|

|

|———— ワラント(W)：私生活および仕事において楽しめていれば、生活が充実していると言える

|

根拠(G)：毎日会う友人が大学にいて、卒業後にはSEとして働くというビジョンを持っており、カードゲームという趣味で楽しんでいる (から)

このようなワラント(W)を補えば、なぜ根拠(G)から主張(C)が導けるのかが、より明白になるだろう。生活が充実していると言えるための一般的条件とは、私生活および仕事において楽しめている、ということであるが、ここでの根拠(G)を見ると、私生活においても仕事 (の展望) においても楽しめていると言えるだけのものが揃っている、と言えそうだからである(注21)。

以上、ここまでの流れをまとめると、主張に現れる言葉を定義し、その定義に従って根拠—主張の間のワラントを埋めることで、元の学生レポートに見られた弱い論証が、堅実で隙のない強い論証へと生まれ変わった、ということになるだろう。

最後に第三として、論証の全体構造について。元の学生レポートを読んだときに我々が持った違和感とは、挙がっていた3つの根拠が、なぜこの3つなのか、なぜこの順番で並べられていたのか、といったものであった。気まぐれで挙げられているだけで秩序だっていない、つまり、主張—根拠という論証の全体構造が有機的になっていない、というのが我々の不満であった。ここで、上のトゥールミンモデルを眺めれば、なぜ我々がそのような違和感を持ったのかが明らかになる。つまり、挙げられていた3つの根拠(G)と、その根拠(G)から主張(C)への橋渡しをするワラント(W)との間に、やや齟齬があったと認められるのである。「生活が充実している」という主張(C)が言えるためには、「私生活および仕事において楽しめている」というワラント(W)を経由する必要が我々にはあったが、元レポートに挙げられた根拠(G)が、そうしたワラントを経由できる体裁で提出されていなかったと、トゥールミンモデルによって議論全体を再構成したときに、後から分かるのである。

ここで、求められる論証の全体構造に合わせて、無秩序であった根拠を再構成する、という作業を行ってみよう。より具体的には、主張(C)とワラント(W)に合わせて、根拠(G)を改善する、という調整を行って

みる、ということになる。上のトゥールミンモデルでは、ワラント(W)が「私生活および仕事において楽しめていれば、生活が充実していると言える」となっていた。なので、根拠(G)に入るべき情報とは、「私生活および仕事において楽しめている」こと、ということになる。そうした仕方で、3つのバラバラだった根拠を組織化してみれば、次のようになる。

主張(C)：人生には意味がある

↑

|—————ワラント(W)：人生に意味があること＝生活が充実していること

|

根拠(G)：生活が充実している（から）

↑

|

↑

|

根拠(G)：生活が充実していれば人生に意味があると言えるし、
逆に生活が充実してなければ人生は無意味なものとなる（から）

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

根拠(G)：私生活においては、毎日会う友人が大学にいて一緒に趣味を楽しむことができているし、仕事の展望について言えば、卒業後にはSEとして働くというビジョンを持っている（から）

このように、主張(C)—ワラント(W)—根拠(G)という元レポートの全体構造(注 22)をトゥールミンモデルによって眺めることができ、こうして全体的な森を一望することが可能になることで、なぜ元レポートの全体の構成が悪かった（今回のケースだと、根拠の組織化が未熟であった）のかが理解しやすくなる。ここで我々が使った拡張型トゥールミンモデルの利点とは、森と木を同時に表示することができ、しかも単なるパラグラフ構成といった形式性を越えて、論証そのものを取り出すことができる、という点にある。

以上を踏まえ、完成されたトゥールミンモデルを眺めながら元レポートを改善したのが、以下の文章である。下線部が、トゥールミンモデルを使って改善された部分にあたる。1 節で我々が見た元レポートと比べてみると、言葉の定義、ワラントによる論証の補強、有機的な全体構造、という3つの点において改善されていることが、見て取れるだろう。

私は、人生は有意味だと思います。「人生に意味がある」とはどのようなことを考えた上で、私の人生を眺めてみると、人生が有意味だと言えるだけの根拠があると思えるからです。

まず、人生が有意味だ、というのはどういう状況を指しているのでしょうか。私は、人生が有意味だと言えるための条件とは、「充実した生活が送れている」ことにあると考えます。なぜなら、充実した生活を送っていたら人生に意味があると我々は感じるし、逆に、生活が充実しておらず空虚に感じられるのなら、我々はそれが意味のある人生だとは思えないからです。

この「充実した生活が送れている」という基準に照らしてみると、私生活や仕事を楽しんで生活を送れているかが、人生の意味を考える上でのポイントだと言えるでしょう。そこで私の生活を見てみると、私生活と仕事の展望という2つの面において、充実した生活が送れていると感じています。それぞれ

について、説明します。

まず私生活では、毎日会う友人が大学にいて、人とのつながりを感じていますし、趣味ではカードゲーム同好会に所属しており、週2回の活動で、仲間とカードゲームをします。授業の合間にも、食堂で仲間とカードゲームをして、楽しいことも多いです。

次に仕事に関して言えば、私には大学卒業後の展望があります。会津大学はコンピュータの専門家を育てる大学であり、卒業後にはSEとして働くというビジョンを持っています。

以上のように、私は公私ともに生活に充実感を感じており、そこから人生が有意味だと判断します。

この文章は、総論-展開-結論という、パラグラフィティングでお馴染みの形式を満たしており、その点では元レポートと大差はないと思われるが(注 23)、レポート課題の「人生の意味」についての論証を展開するという観点からすれば、大きな前進が見て取れるだろうと思う。トゥールミンモデルは、こうした内容のある論証をつくっていく上で、有効な思考ツール(あるいは指導用ツール)となることが期待できる。

4. 結語

本稿ではまず、パラグラフィティングに代表される<形式性>を満たすだけでは内容的に不満足であるような、学生による典型的なレポート例を挙げ(1節)、中身のある<論証>を考える上で役立つトゥールミンモデルを紹介した(2節)。元々のトゥールミンモデルは法学を範につくられたもので、他の領野に適用したり、教育的ツールとして用いる場合には、手直しをしながら使っていくことが重要である。そこで本稿では、1節でのレポートをどのように改善させていくか、というライティングへの橋渡しをするシーンを想定して、トゥールミンモデルの活用法を模索した(3節)。本稿で提案したのは、C-W-Gのユニットが<縦>と<横>に伸びていくことを許容する拡張型モデルであったが、この拡張型トゥールミンモデルの利点は、論証の全体構造という森と、各論証という木を同時に表示することができ、しかも表現形式ではなく、中身である論証そのものを扱うことができる、という点にあることも示された。

本稿で触れられた論点に関連した、いくつかの問題点ないし今後の課題について、最後に3点ほど述べて終わろう。

まず一番大事な点は、本稿3節で示されたようなレポート改善の方針は、規範的な観点から「理想像」を述べたにすぎないのであって、実際の学生のレベルに合わせた指導や、学生の上達方法については別途考えていかなければならない、ということである。私はこれまで、トゥールミンモデルを使って文章表現を教えてきたが、他の教員からは「もっと基礎的なところに問題がある」、「教えるには難しい」といった言葉を聞かされてきた。私は本論1節で、パラグラフィティングを守ることで論証の中身が形骸化するケースを指摘したが、逆に、トゥールミンモデルについても、消化不良を起こしたまま教えてしまえば同じような弊害が生じるだろう。学生のレベルに合わせた段階的指導法については、いろいろ試して改善していくしかないだろうと考えている。

次に、これも同じくらい大事な点だと思われるが、本論で私が提案した拡張型トゥールミンモデル(ミニマムなC-W-Gを1ユニットとするモデル)は、確かに<論証>がある限り汎用性のある議論モデルであるとは言えるだろうが、具体的にどのような形態で各々のケースにおいて当てはまるのかはよく分かっていない、ということである。トゥールミンらが*An Introduction to Logic* (1979)で、いろんな領野へとトゥールミンモデルを当てはめようとしたように、実際の議論へとモデルを当てはめてみることを通じて、随時トゥールミンモデルを手直ししていくことが必要であろう。「この領野においては概してワラント(W)は要らない、しかしあの領野ではワラント(W)が肝になる」、といった「使い分け」も予想される。また、場合

によっては、「このようなケースにはトゥールミンモデルは上手く当てはまらないし、むしろ議論を理解する上で有害ですらある」といった判断も出てくるだろうと思う。こうした、有効性／有害性および適用可能範囲についての研究は、今後続けていくべきだろう。

最後に、トゥールミンモデルはC-W-Gおよび限定詞(Q)、反駁(R)、裏付け(B)という6つの項目からなる議論モデルであるが、しばしば「ミクロな議論のモデル(Micro-argument model)」と呼ばれてきたように、基本的にカバーできるのは、1つの主張(C)に1つの根拠(C)が充てられているような、各議論、言わば「木」のレベルの議論である。木と木がつらなるとどのような流れ(「林」)ができるか、林と林が関連することで全体としてどのような構造(「森」)になるのか、についてはトゥールミンモデルではない他のプレート(並列型、直列型など)を用いるのが通常である。本論は、各議論レベルにとどまらない、もっと広い範囲にまでトゥールミンモデルが拡張できることを示したが、例えば直列型のプレートを拡張型のトゥールミンモデルで無理に描こうとすると、むしろ煩雑になり使い勝手(有用性)が下がってしまうことが容易に予想される。こうした事情から、トゥールミンモデルが適用できる領野だけでなく、サイズについても研究を進めていくことが必要であろう。

注

- 1) もちろん、初年次教育はアカデミックスキル教育よりも高次であり、「受動的な学びから能動的な学びへ」、「人間関係をつくる」、「スケジュールを管理する」といった広範な内容をも含むと言われるが(河合塾(編)2010, p. 6.)、中でも「大学レベルのレポートが書ける」ことはやはり、実際にレポートや定期試験で論述を課す教員側からすれば、現実的かつ早急な問題であろう。
- 2) 井下(2013), p. 88.; 倉島(2012), 第2部; 倉島(2014), pp. 70-106.; 戸田山(2012), pp. 150-155.などを参照。
- 3) 倉島(1999), pp. 108-109. および、会津大学文化研究センター 文章表現法テキスト「論理的文章表現(2016年度版)」を参考に作成。
- 4) ここで、人生が有意味であることを「幸せな生活を送ること」と定義しても、単なる言い換えにすぎず、「人生の有意味さ」の概念についての理解が深まったとは言えないと感じる読者もいるかもしれない。しかし、抽象的な「人生の意味」を、学生が論じやすい「幸せな生活」と置き換えることは、論を進める上で有益であるので、その意味では一歩進んだとすることができるだろう。
- 5) これはつまり、パラグラフライティングのような表現の形式性に留意する以前に、内容についての深い(ここでの言い方からすると、論文全体についての「有機的な」見通しという)洞察が、良い論文には必要であるということを示しているように思える。そうした意味で、内容に中身(深さ)があるということは、形式的な表現技法に先立つ必要条件であると言えるだろう。それに加えて、形式性を満たすということも、良い論文であるための必要条件であると言える。これら2つ、内容の中身(深さ)と形式性はともに、良い論文の必要条件だと言えそうだが、では2つで十分かと言えば、それはちょっと分からない。2つが揃っても良い論文には届かないのかもしれない。またひょっとすると、これら2つが揃わなくても、良い論文というのは生まれるのかもしれない(それぞれ、厳密な意味での必要条件ですらないのかもしれない)。
- 6) もちろん、学生が書くレポートの不出来に関わるのは、これら3点のみではない。その点で、網羅的ではない。だが、文章の中身については、これまでの私の経験からして、学生の書く文章はこれら3点が特に弱いように感じられる。こうした私的印象の正しさを検証するには、もっと網羅的・定量的な分析が必要であろうが、本稿に際してはそうした準備は行えなかった。
- 7) 引用の中では、「哲学者の理想」と書かれているだけで、これが形式論理学のことを指すとするのは強

引と思われるかもしれない。しかし、この引用に先行するパッセージでは、伝統的な三段論法や演繹的推論が同書が乗り越えるべきターゲットとして言及されているので、トゥールミンの意図は明らかである。

8) トゥールミンモデルを利用しているアカデミックスキル関連の書籍は多いが、その中でも比較的詳しく説明されているもの、例えば、クルーシアス・チャンネル(2004)、福澤(2012)、倉島(2015) などであっても、出来合いのモデルを紹介して使い方を説明しているだけで、こうしたトゥールミンの意図について記されていない。後述するように、本当に実際の議論の行い方に合致するのとか、適用上での限界について自覚的になるためには、トゥールミンモデルがいかにか構想されたのかを理解しておくことが役に立つだろう。

9) 議論教育やディベート教育では、必ずと言ってよいほどトゥールミンモデルが登場する。比較的詳しく扱われているものとして、Wood & Goodnight (1995)、ジューゲルミュラー・ケイ(2006)、西部(2009)などを参照。

10) Toulmin(2006), p. 26. を参照。正確には、その男性の彼女がコミュニケーション学を学んでいたので「トゥールミン」という名前に馴染みがあり、トゥールミンの妻が「はい、私は彼と結婚しています」と言ったところ、次の週に彼がまたやって来て、「なんてこった。僕の彼女はそんなことはあり得ないと言っている。トゥールミンはアリストテレスのすぐ後の時代に生きた人物なのだから」と言った、というのがトゥールミンの講演の内容だが、本文中では仔細を書くとは煩雑になるので、この注で補足しておく。ちなみに、その彼女がトゥールミンをアリストテレスと同じく遠い過去の人物だと思いきや、おそらく、コミュニケーション学で使う教科書の中ではアリストテレスのすぐ次にトゥールミンが登場するので、近い時代の人だと勘違いしたのが原因だと思われる。

11) 近年では Hitchcock & Verheij (2006)が、トゥールミンモデルを真正面から、しかも多角的に取り上げた唯一の著作であると思う。この論文集には、トゥールミンモデルの実質的な変容を提唱するような、意欲的な論文も収録されている。

12) 哲学分野の挑戦的萌芽研究(2013-2015)「学際的な議論教育からのトゥールミンモデルの再検討と、新たな議論モデルの効果測定」(研究課題/領域番号 25580005)を取得して、「トゥールミンモデルは本当に色々な議論に当てはまるのか?」というテーマについて、議論教育やディベート教育に携わる研究者グループで検討した。本論は、そこでの研究成果に基づいて書かれている。

13) 根拠とワラントとの違いなど、初学者が躓きがちな点についての説明には、福澤(2012), pp. 92- を参照されたい。同書では、warrant を「論拠」と訳している。しかし私は、トゥールミンモデルの良さ(原語の ground, warrant といった言葉が一般人に分かりやすかったのが、トゥールミンモデルが広く使われた主要因であったこと)を活かす上で、「根拠」との区別がつかない「論拠」という訳語を warrant に当てるのは賛成しない。本論では、ground を「根拠」、warrant は「ワラント」と訳すことにする。特に、「ワラント」と訳すのは、warrant が持つテクニカルな意味を分かってもらうためである。本来は、「土台」、「保証」といった原語を活かした訳語の方が、原語を伝える上ではベターなのだろうが、これだと日本語の慣例に合わないので、「根拠」「ワラント」とする。

14) Toulmin(1958/2003), pp. 103/96.

15) 「サウジアラビア生まれはイスラム教徒である」という命題は「一般的法則」というよりも、「経験的一般化」という方が適切だ、と指摘されるかもしれない。ただし私はここで、一般的法則というのを、必然性を伴わない、緩い意味での一般化と近い意味で使っている。

16) というか、議論(argument)は「根拠によって支えられた主張」と定義されるものなので、根拠(ground)は、議論の構成要素として必ず入っているということになる。

17) 前述の挑戦的萌芽研究「学際的な議論教育からのトゥールミンモデルの再検討と、新たな議論モデル

の効果測定」を指す。

18) Aoki(2014)での発表に基づく。(3) (4) (5) (6) (7) の順に、Reed & Rowe (2006), p. 355.; Verheij (2006), p. 195.; Voss (2006), p. 308.; Klumpp (2006), p. 104.; Tans (2006), p. 221. を参照されたい。

19) Verheij (2006), Tans (2006)などを参照。

20) 言葉の定義については、論理学の教科書などを見ると複数の方法が紹介されている。しかし初年次レベルのレポートについてであれば、本論が提示するように、必要十分条件を満たすか否かをチェックするだけでも、かなり深いところまで考察を深めることができるだろうと考える。例えば、「オタク」と「マニア」は定義上同じものなのかについて、「オタクならばマニアである」のか、逆に「マニアであればオタクである」のか等を学生と一緒に考えるのが有用であろう。

21) ここで、このワラント(W)がなぜ成り立つのか、その根拠(G)は何か、という疑問が生じてくるかもしれないが、「生活を成り立たせているのは、私生活および公的生活(=仕事)であるから」と答えれば十分だろう。αの場合と同じく、ここまで書くと煩雑な印象を与えると思われるので省略する。

22) ここでのレポート例では、全体の論証構造が C-G というもの（主張に対して3つの根拠を挙げるタイプ、いわゆる並列型と呼ばれるもの）であったので、W を加えた C-W-G が全体構造となっていたが、これは比較的単純な例であって、もっと長い専門論文の場合など、もっと複雑な全体構造になるケースもある。例えば、理系のジャーナル（データを使う心理学、社会学なども含む）では論文のフォーマットが概ね決まっており、そうしたテンプレートに沿って大量の論文が日々生産されているのは誰もが知るところだ。そうしたもっと複雑な全体構造を持った論文が、はたしてトゥールミンモデルで描き切れるのか、というのは別途考えるべき重要な問題であるが、本論の範囲からは大きく逸脱している。そもそも、トゥールミンモデルは各議論というマイクロ構造（木）を扱うためのモデルで、木と木のつながり（林）や、全体的な構造（森）には別途モデルが必要になる。しかし、林であれ森であれ、＜論証＞に関わるものであるのなら、そこには必ず主張—根拠の関係があるわけで、その意味で、トゥールミンモデルはどのようなサイズにも汎用的に当てはまる議論モデルだと言うことはできる。

23) 元レポートの書き方（理由を3つ挙げます、第一に、第二に、第三に、・・・）の方が形式性において優れていると評価する読者もいるだろう。そうしたフラットな並列的な書き方を許す課題であればよいだろうが、ここで問題になっている「人生の意味」のような、解釈や論証を要するようなテーマについては、形式的な並列型テンプレートはむしろ不具合だったとも言えるだろう。

【参考文献】

- Aoki, Shigeyuki ---(2014) “Dialectical Modification of Toulmin's Model of Argument for Educational Debate”, The 2nd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, Kyoto University, Japan
- 井下千以子 ---(2013) 『思考力を鍛えるレポート・論文作成法』, 慶應義塾大学出版会
- Wood, Roy V. & Goodnight, Lynn ---(1995) *Strategic Debate* (5th edition), National Textbook Company
- 河合塾(編) ---(2010) 『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』, 東信堂
- T.W.クルーシアス・C.E.チャンネル ---(2004) 『大学で学ぶ議論の技法』, 杉野俊子・中西千春・河野哲也訳, 慶應義塾大学出版会 (原著は2000)

- 倉島保美 ---(2012) 『論理が伝わる世界標準の「書く技術」』, 講談社
 ---(1999/2014) 『書く技術・伝える技術』, あさ出版
 ---(2015) 『論理が伝わる世界標準の「議論の技術」』, 講談社
- Klump, James F. ---(2006) “Warranting arguments, the virtue of verb”, in Hitchcock, D. & Verheij, B. (eds.) (2006), pp. 103-113.
- G.W.ジューゲルミュラー・J.ケイ
 ---(2006) 『議論法 探求と弁論 第3版』, 花書院 (原著は1997)
- Tans, Olaf ---(2006) “The fluidity of warrants: using the Toulmin model to analyse practical discourse”, in Hitchcock, D. & Verheij, B. (eds.) (2006), pp. 219-230.
- Toulmin, Stephen
 ---(1958) *The Uses of Argument*, Cambridge University Press (邦訳は2011)
 ---(2003) *The Uses of Argument* (Updated Edition), Cambridge University Press
 ---(2006) “Reasoning in Theory and Practice” in Hitchcock, D. & Verheij, B. (eds.) *Arguing on the Toulmin Model: New Essays in Argument Analysis and Evaluation*, Springer
- Toulmin, Stephen / Rieke Richard / Janik Allan
 ---(1979/1984) *An Introduction to Reasoning* (1st/2nd edition), Macmillan Publishing
- 戸田山和久 ---(2012) 『新版 論文の教室』, NHK ブックス
 西部直樹 ---(2009) 『はじめてのディベート』, あさ出版
- Verheij, Bart ---(2006) “Evaluating arguments based on Toulmin’s scheme”, in Hitchcock, D. & Verheij, B. (eds.) (2006), pp. 181-202.
- Hitchcock, D. & Verheij, B. ---(2006) *Arguing on the Toulmin Model: New Essays in Argument Analysis and Evaluation*, Springer
- Voss, James F. ---(2006) “Toulmin’s model and the solving of ill-structured problems”, in Hitchcock, D. & Verheij, B. (eds.) (2006), pp. 303-311.
- 福澤一吉 ---(2012) 『文章を論理で読み解くためのクリティカル・リーディング』, NHK 出版新書
- Reed, Chris & Rowe, Glenn ---(2006) “Translating Toulmin diagrams: theory neutrality in argument representation”, in Hitchcock, D. & Verheij, B. (eds.) (2006), pp. 341-358.